はじめに

ずいぶん長い歳月^{としつゆ}、子どもといっしょに授業をしてきました。昭和のしょっぱなから定年まで、定年がすぎてもう二十年余り、わたしは、いまもって授業に飽いたり、魅力を失ったりしたことはありません。授業に憑^つかれた教師を何人か知っていますが、わたしもそうした仲間の一人ではないかと自負しています。

わたしが、東京に出て勤めた東京高等師範学校附属小学校（のちの東京教育大学附属少で行なった最初の公開授業、きざつぽくいうと、それはわたしの東京初舞台、これが短歌の指導でした。

その後、校内はもちろん、全国各地に招かれ、小学校国語科の全ジャンルにわたって授業をしてきました。そのなかで手がけることのとくに多かったのが詩歌です。

詩歌、なかんずく、わたしがもつとも関心を寄せてきたのが俳句でした。戦中・戦後と作句を続け、他方、俳句の指導にもあたってきました。しかし満足のいく授業は、一度もありません。

ところが、ここ数年、わたしは、全国各地の子どもたちが作る子ども俳句に目を覚まされました。そこでまず、これまでの俳句教材を、新鮮にはねている子ども俳句にとりかえました。

作句についても、伝統の写生主義にこだわらず、子規も許容し、奨^{すす}めている想像による味つけの表現法を工夫してみました。

そこで、なんと、作句の入門は、物語を手がかりにし、ここから俳句を発想するというのです。そ

の教材として最初にとりあげたのが、子どもたちに好んで読まれる「こんぎつね」です。

これまでわたしの行なってきた、読む、作るの俳句指導とは大きくちがっていますが、多くの子どもに出会って重ねてきた実験的な授業の成果、その手応えは十分です。

俳句は、これを学び、学ばせるに、言語・文学・教育にわたって、きわめて豊かな価値を内蔵しています。国語教室が、俳句指導にどう取り組むべきか。子ども俳句の火は、国語教室の外に、燃え広がっています。

第二章 俳句は子どもの感性を鋭くする…………… 7

子ども俳句に開眼する

やきたてのクッキーみたいな春の風

自分にも作れそうだと思わせる

俳句学習は片隅におかれている

俳句のよさは伝わっていた

第二章 俳句を読む…………… 31

抵抗感をもたせない

子どもの作品で詩心うたこころをゆさぶる

どのように句意を理解させていくか

◎子どもに知っている俳句を聞く◎子ども俳句ブームについて話す◎子ども俳句を紹介する

◎教材を書き写させる◎句意を考える◎音読してみる◎クイズ仕掛けで句を解釈する

◎俳句を散文してみる◎俳句的表現の特徴に気づかせる

俳句を作ると……………63

なにを手がかりにして作句するか

◎教師の作句経験が授業を豊かにする◎子どもの発語を敏感に受けとめる

◎写生の句と、想像を交えた句◎読むことと書くことを一体化する

物語を読んで俳句を作る

◎なぜ、「こんぎつね」を選んだか◎知っている俳句をたずねる◎「見て作る」と「読んで作る」◎物語俳句を提示する

◎「こんぎつね」の復習をする◎「こんぎつね」から季語を見つける◎季語と場面をつなぐ◎欠落を埋めて一句にまとめる

◎作句にとりかかると◎作品を発表する◎どんな作品ができたか◎子どもの作句感想から

俳句学習でことばをみがく

俳句学習の世界を広げる

授業記録・俳句を作ると……………105

知っている俳句を発表する

「見て作る」と「読んで作る」

「こんぎつね」の復習をする

「こんぎつね」から季語を見つける

季語と場面をつなぐ

欠落を埋めて一句にまとめる

俳句にとりかかる

作品を発表する

俳句づくりのすすめ

第五章

子どもにも学ぶ……………145

子どもにももらった「授業論」

授業のなかの子どもの視点

◎先生はこわい？◎教師の表情とは◎授業の楽しさとは◎時間を短く感じるとは

◎遊びのような授業で、いつのまにか…………◎教師のパワーとは

俳句を生活に広げる

この本でとりあげた子ども俳句一覧……………163

「ひと」BOOKS・シリーズ発刊にあたって……………166

たんぼぼの種はどこかへ

行くとちゅう

母の日です

茶わんあらいを

かくれてする

先生が

たいいんしたよ

とんぼさん

◎子ども俳句に開眼する◎やまたてのクッキーみたいな春の風◎自分にも作れそうだと思わせる

◎俳句学習は片隅におかれている◎俳句のよさは伝わっていた

第一章

俳句は子どもものの感性を鋭くする

子ども俳句に開眼する

もう十年、あるいはそれ以前から、俳句を作ることが広く行なわれていることが話題になっていました。戦前から俳句になじんできたわたしは、俳句界の情報にはなにほどかの関心を寄せていました。しかし、このところの俳句ブームといわれる状況の内容は、わたしの関知するところをはるかに上まわっているようです。

俳句人口の急激な拡大は、女性、それも年輩の主婦層の作句活動によるものといわれています。主婦が余暇をもてるようになったこと、学習に好都合なカルチャーセンターなどの普及、あるいは、手近な生活圏（コミュニティ）に、小さな俳句サークルが生まれてきたことなどが、そのブームの要因でしようか。

もちろん、その間にマスコミの介在が大ききはたらきをしているでしょう。新聞、雑誌、放送はみな投句を誘い、そこへ手軽に参入できる指導の手を伸ばしています。

女性の作句熱が盛んな一方で、子どもたちの俳句学習も急速に広がってきました。

子どもの俳句を募集し、審査し、評価している俳句大会には、なんと、十万、二十万という大量の応募があるそうです。

この子ども俳句隆盛のかけには、もちろん多くの教師たちがいるはずですが、しかし、その指導は、いわゆる国語科の授業のなかでというのではなく、そこからはみ出して、もっと大きなスケールのな

かで行なわれているようです。

個々の子どもが興味をもって作り、投句しているものもかなりあるでしょう。あるいはまた、学校を挙げて大量に投句しているケースも少なくないようですが、これらとはべつに、もっと大量に作られているところがあるのかもしれない。

子どもが俳句を作っているのをのぞき込んだ親は、面白そうで、案外とユニークだと興味をもち、一緒に俳句を作り出します。

こうして、大人の世界へ俳句をひろがらせたエネルギーを秘めていたのが子ども俳句である、と自負しています。

右は、一茶にゆかりがあるといわれている東京都足立区炎天寺に本部のある、「炎天寺一茶まつり全国小中学生俳句大会」の選者であった、俳句作家・楠本憲吉氏の述懐です。

俳句ブームは国内だけでなく、海外にいる日本人の大人、子どもにも愛好されています。しかもそれは、日本人だけでなく、外国人、その外国人の中心にはプロの作家、詩人もいます。かつては、季感・季語などが障害になるなどといわれた国々にでも、いまはもうそのようなワクや垣根などさつさととり払われ、乗りこえられています。

話が少し広がりすぎました。子どもの俳句情況にしばってもう少し考えてみましょう。

たしかに子どもの俳句は、過去にはみなかった盛況をみせているのですが、わたしの周りにいる教

師のなかで、クラスの俳句指導、あるいは学校全体の作句活動を推進している者はほんの二、三人です。もちろん、教科書に載せられている教材を読んだり、書いたり、わからせたりとの指導はいちおうどの教師もしているでしょうが、作句の指導から作品応募の世話まで、手を広げている教師は、子ども俳句が盛んになったといっても寥々たるものではないでしょうか。

わたし自身は、戦中・戦後ずっと作句を続けてはいましたが、これを積極的に国語科の指導にもちこむことには消極的でした。理由は、それを国語教室のものとする確信がもてなかったからです。確信とは何か。俳句が、言語の理解と表現にどのような価値をもつかです。

このもやもやを一気に払拭してくれたのが、子ども俳句の盛況です。うかつにも、わたしが、この情報に関心をもったのは、かなりおくれっていました。

やきたてのクッキーみたいな春の風

子ども俳句の盛況といっても、具体的に、その状況を見たわけではありません。わたしを子ども俳句の世界に引きこんでくれたのは、次に掲げる二つの句集です。

『俳句の国の天使たち』（日本航空広報部編）

『句集 ちいさな一茶たち』（楠本憲吉・炎天寺編）

『俳句の国の天使たち』は全ページの半分が、子ども写真（カラーと一部モノクロ）と、何ページかの切り絵、そして、各ページに一句ないし二句、小中学生の俳句（片隅にこの句の英訳）が挿入されています。

登載されている句は、水野あきら氏の選ばれたものだそうですが、これが粒選りの秀句です。わたしは、この句集を何回となく読みました。そして、ひじょうに強い衝撃を受けました。それはまさにわたしの子ども俳句開眼だったのです。読んでいるうちに、これまでもっていた、子ども俳句の理解を大きく変えさせられました。

これまでの子ども俳句はたいいてい、大人の俳句を下敷きにしたものか、子どもっぽいものの方や、舌足らずの表現でした。しかし、これはこれで、独自のよさがあり、それだけに一つの存在価値をもっていると思つて受けとめてきました。

ところが、『俳句の国の天使たち』には、次のような作品がずらりと並んでいるのです。

やきたてのクッキーみたいな春の風

小四 佐々木千里

たんぽぽの種はどこかへ行くとちゅう

小五 石井博

空ぶりのバットのむこうにいわし雲

小四 松田京平

とりあげればきりがありませんが、ここには、もう大人の真似、稚拙さを売り物にするような句はほとんどありません。子どもの目でとらえ、子ども特有の感性と発想による文字とおりの子どもの俳句が作られています。

このような作品にふれているうちにわたしにも、俄然、指導意欲が湧いてきました。こういう俳句を教材にすれば、子どもはかならずのつてくる。そんな期待がわたしをつき動かします。先に述べたもやもやが一気に拭かれて、「子どもの育つ国語教室」は、俳句によっても拓けるといふ歓喜のようなものが湧いてきました。

子ども俳句も歴史を重ねてきました。たいそう評判になった作品もいくつかあります。

天国はもう秋ですかお父さん

小五 塚原彩

この句を子どもたちに読ませると一瞬はっと驚き、「はあ、そうなのか」と、一種の感慨をたたえた静かな顔に変わります。子どもたち何人かに解釈をさしてみたり、わたしが補説をしたりしていると、そっと涙ぐんでくる子どもおりました。

天国に行った父親は、たぶん急死だろう、だとすると交通事故かな、まだ男ざかりだったにちがいない。そんな平凡な思惑が浮かんできます。

一昨年のおつごころだったか、何気なくテレビにスイッチを入れると、草柳大蔵氏が画面に出ていて、なんと、この俳句をとりあげて話しているのです。おやと思っただけで見てみると、氏は、この俳句の作者に電話をして、父親の死因をたずねたそうです。ところが、わたしの憶測した交通事故ではなく、(聞きとりは確かではありませんが)心臓に係った病気だったようでした。わたしはこの句に対する草柳氏の関心の強さに驚きましたが、この句については、すでに『句集 ちいさな一茶たち』のなかに、

楠本憲吉氏が、

この句の作者に私は会いたいと思います。このきびしい美しさのある句を作った子に脱帽します。

「うつくしい」ということには二種あって、一つは「美しい」という美的うつくしさ、もう一つは厳しさの美「厳(うつく)しい」です。この厳しさの美を創る鍛練が大切なのです。

と書かれています。『句集 ちいさな一茶たち』のなかには、もうひとつ評判になった句がとりあげられています。

さそり座の尾の一げきに流れ星

中二 村上克美

楠本氏もメンバーの一人であった「男の井戸端合議・五人の会」(扇谷正造、草柳大蔵、楠本各氏ほか二人)、この五人で書いた『花も嵐も踏みこえて』という本のなかにある座談の記事に、こんな一節があるそうです。

扇谷氏の「いつか楠本さんから聞いた『さそり座の尾の一げきに流れ星』、あの俳句にはびっくりしましたね」という発言に楠本氏が、話を合わせて、こんなことをいっています。

「子どもたちの作品を」たくさん見ていまして、ハッと目を見張る思いをしたのが『さそり座の尾の一げきに流れ星』。これは中学校二年生の子の句です。僕はあまりうますぎるので怖かった。お父さんお母さんの代作か、あるいは盗作かもしれぬと思って電話したんです。そしたら、これはアニメなんです。テレビの場面が変わると、さそり座がさそりになる。それがピンと尾をはねたら星を一つはねて、それがビュッと落ちていって流れ星になったというんですね」

このいきさつを聞いて、草柳氏が、「でもよかったなあ。テレビという媒体がなくて、その子が本当に夏の夜空を見てつくったんだったら、脅威だよ」と、ホッとされていましたし、楠本氏は「もうこっちはお手上げですよ」。草柳氏も「もう物書きはやめるよ(笑)」と感嘆しています。

楠本氏は、二十何年も、子ども俳句の評価にあたってきているそうですから、子ども俳句についての理解がひじょうに深く、豊富な話題の持ち主でしたが、先年なくなりました。

おしまいに、新聞のとりあげた、子ども俳句の秀作を並べてみましょう。

さんかん日うしろにかあさんいいにおい 小一 すきおかしんべい

でかせぎに父いく日には本高く読み 小三 安田宏光

麦の秋家中まどを開けて留守

小六 田中正範

あじさいの庭まで泣きにきました

小六 惣田美由紀

ふくらんだカーテンの中夏たまる

中二 吉野輝彦

以上五句、読売新聞一九九〇年五月十日「編集手帳」に引用。

たけのこよ／ぼくもギブスが／とれるんだ

小二 畑上洋平

君のきれいな目から／ひとつぶひとつぶ／真珠が落ちる

メキシコ・男・10歳

秋風がそっと／雁をせき立て／巢へもどらせている

フランス・女・12歳

右三句は、『地球歳時記'90』所収。一句目は大岡信氏が朝日新聞・九一年五月十六日「折々のうた」で、他二句は、九〇年八月十八日「天声人語」で紹介。